

平成30年度 政務調査研究報告書

会派名	会派みらい	支出伝票No.	
事業名	先進地視察事業（鹿児島県 伊仙町）		
事業区分（該当へ〇）	⑥ 調査研究費 ② 研修費 ③ 広報費 ④ 広聴費 ⑤ 陳情等活動費 ⑥ 会議費 ⑦ 資料作成費 ⑧ 資料購入費 ⑨ 人件費 ⑩ 事務所費		

(1)この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

直面する人口減少による縮小社会に向き合うためには、地域資源を生かすことから、市民生活の基盤づくりを行うことが重要であるとの前提に立ち、これを実践する自治体から学ぶ。

(2)実施概要

調査・研修の場合の	日時	訪問先・主催者等
実施日時と 訪問先・主催者	平成30年 7月 23日（月） 13時30分～ 15時30分	伊仙町役場

視 察 内 容	<p>1 視察先の概要 「子宝日本一」のまち。徳之島空港は、2012年から「徳之島子宝空港」の愛称 人口 6,753人 第1次産業が主要産業。長寿世界一を2人も輩出、H15年～H24年までの10年間連続、合計特殊出生率2.81が全国1位。</p> <p>2. 視察内容 出席者：伊仙町長 大久保 明氏 ・伊仙町議会議長 美島盛秀氏 ・未来創生課長 久保 等氏 ・未来創生課主査 松岡由紀氏 ・町民生活課長 水本 斉氏 ・保健福祉課長 澤 佐和子氏 ・保健センター次長 大郷千枝美氏 ・議会事務局長 穂 浩一氏</p> <p>3. 懇談内容 「健康・長寿と子宝のまち」から</p> <p>1. 伊仙町における主な子育て支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母子栄養強化事業（妊婦と子供の健康づくり=町の単独事業） ・NPO 法人との連携（家庭訪問型子育て支援） ・新生児全戸訪問（助産婦へ委託）定期的に母子と会う機会を持つ <p>2. 伊仙町の子育ての特性、魅力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者間、地域間で子どもを見守る”顔が見える”地域性がある。地域が見守ってくれるのでお互いに頑張れる（町が子宝と言われる大きな要因） ・子どものことには町民が協力的であり、町民はそれが当たり前と思っている ・移住者にはおせっかいな人が多い ・皆が顔を合わせる場づくりに熱心 ・一家庭3人～4人が当たり前（2, 3人の家庭は少ない） ・小集落の小規模校を残していく（町長の方針） （小規模校への優先的な住宅建設、集落の歴史・伝統文化の継承、復活などの施策を推進） <p>3. 伊仙町の人口動態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的人口変動が少ない（Uターンの増加、緩やかな人口減少） ・長寿者が多い（90歳以上が人口の4%） <p>4. 「合計特殊出生率」全国1位の要因</p> <p>①「子ども宝」（くわーどうたから）＜子は宝＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古くからの教え、みんなで見守り子育てを支援 <p>②高い地域力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地区公民館での合同祝い（こどもの生誕祝い、小学校入学祝、成人の祝いなど） <p>③共助の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育てに対する親族や地域の人々からの支援網が充実している
------------------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に、子・孫の世話を生きがいとする高齢者が多い ・地域における育児の支援者でもある、食生活改善推進委員、児童委員などの活動が盛んである <p>④出産、育児に関する公的サービスの充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園、保育園の設置数が多くサービスが利用しやすい ・敬老祝い金を減額し、一部を子育て支援に充てる（町政懇談会での高齢者からの声を反映） <p>5. まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人々の暮らし方が地域力を生んでいる（深い郷土愛とそれを育む風土） ・耕作放棄地はほぼゼロ。若い人の就農が多い ・豊かな人間関係の中で育つ子供のほうが、かつての価値観（高学歴、大企業）を持つ子よりも良い子が育つ ・新たな取り組みとして、地方に事業の課題解決の糸口があるのではないかと考える企業をターゲットに「サテライトオフィス事業」を展開
<p>感想 （まとめ） 市に活かせること等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人口 6000 人足らずの町で、小学校が 8 校・中学校は 3 校もある不思議な町。 ・自治会とか公民館活動が、住民のつながりの起点になっているのではなく、離島故に暮らしの範囲も狭く、取り建てる産業もなく、娯楽もなく、それ故に住民人情の底流には共助の精神、寄り添って生きていくといった文化が有るのではないかと。 ・だからこそ、子供に関わることには寛大で、見守り育てていこうといった自然な地域環境が出来ていることが、子供が多いことに繋がっているように感じる。 ・学校だけでなく、保育園も認可保育所 3・へき地保育所 3・事業所内保育所 1 と、園児数 284 名に対し 7 園もあることも特筆されることで、町ぐるみで身近に子供を育てていることにも驚き。 ・出生率 2.81 の背景にはいろいろ有るようだが（キレイ事ばかりではない）、家族とか地域の繋がりが暮らしの中に自然とあることが鍵ではないかと。 ・伊仙町の子育ての最大の魅力は、集落・学校・結の精神・行政・環境 が集結した = 地域力 にある、との紹介があったが、住民アンケートにも【周りに子育てを支援する人がいる・子供がたくさんいても育てていける・子供は宝なので大事に育てようと思った考えが地域にある・兄弟が多いほうがいいという考えがある】といったように、その結果が現れている。 ・結の精神は別にして、行政コストを考えると、この試みがいつまで続けていけるのか興味深いところ。 ・子どもを複数持つのが当然という風土が、出生率を高めている。（職場の理解、地域全体で子育てをするなどの意識などに表れている） ・各集落の伝統文化がよみがえり、世代交代がスムーズに行われているところが大きなカギではないかと。 ・人材が地元に残っていくかというのが数ではなく、質にも課題があり、都会の知恵や頭脳を生かそうというのが実践されていた。 ・「田舎へ帰ろう」に原稿を寄せた松岡さんが、政策が推進されていくとき大きな役割をしている。 ・子どもの運動会に地域の方が来るということが象徴的かと思う。 ・地域の風習が維持、復活していることが、I、U ターンの増加や出生率の向上につながっている。 ・地域が見守ってくれている、という感覚がお互いに頑張れるエネルギーになる。 ・集落の伝統文化を蘇らせる努力をしている。 ・皆が顔を合わせる場づくりに努めている。 ・人々の「暮らし方」が地域力を生んでいる。 ・「サテライトオフィス」の考え方は有効である。 <p>○都市では、現役世代の多くが経済的な不安を理由に子どもを産み控えている現実がある。だが、伊仙町では経済力と子どもの数はほとんど関連していない。伊仙町の 2016 年度の住民一人あたりの課税対象所得（総務省「市町村税課税状況等の調」）は約 221 万円。東京 23 区の平均（約 500 万円）の半分以下。それでも伊仙の人々は出産をためらっていない。</p> <p>なぜなのか。お金がなくても助け合う文化があるからだ。</p> <p>伊仙町ではみんなだいたい畑を持っているし、牛を飼うなど兼業している家庭も多い。穫れた野菜やコメを近所の人たちで分け合う文化もある。現金収入は少なくとも、何とか食べていける。だから、収入が子どもを持たない理由にはならない。</p> <p>長年続いていた転出超過による社会減が、2013 年以降、転入者の増加で社会増へ転換した。その背景には若者たちの心情の変化が見て取れる。</p> <p>これまで町の若者たちは便利で豊かな都会の暮らしを求めて島を出て行った。いまは、逆に都会にはない人とのつながりや地域の絆に価値を見出す若者たちが増えてきている。島の豊かな暮らしが、再評価されはじめていくのかもしれない。</p>